

10代で出産した母子世帯に関する一考察

— 沖縄県でのひとり親世帯への調査から —

出 川 聖尚子

要 約

本研究は、沖縄県の6市町村で実施したひとり親アンケート調査とインタビュー調査をもとに10代出産母子世帯の現在と過去の状況や意識について分析したものである。

調査結果から以下の3点がわかった。

10代出産母子世帯においては、日頃の生活において20代以上出産母子世帯よりもゆっくりのんびりしているという結果がみられたが、20代以上出産母子世帯と異なり、頼りになる人がいることが、「ゆっくりのんびりできていること」や「生活の満足」に関連していないことが分かった。

また、小学生の頃心配ごとを相談しなかった人は、第一子出産のときに「頼らなかった」、「頼る人がいなかった」と回答する傾向があり、小学生の頃心配ごとを相談できないという状況が、第1子出産のときにもだれにも頼らない、頼る人がいないという状況に関係していることがわかった。

さらに、10代出産母子世帯の半数が、「経済的なこと」の心配ごとを第一子出産のときから現在まで抱えていた。また、「親のこと」を心配していた人は、「お金のこと」を心配しており、「親のこと」を心配している背景に経済的なことがあることがわかった。

今回の調査分析から、10代出産母子世帯の母親が子どもの頃から抱えている課題が引き続いている状況が見られることから、現状への支援と同時に過去の状況や思いに寄り添った支援方法が必要である。そして、子ども自身に対する支援を充実させていくことが、おとなになった時の課題を少なくさせることにつながると考えられ、子どものかかわる、地域、学校等で、家庭の問題を予防する対策や、子ども自身や家庭の課題が発見しやすいような仕組み、また、出てきた課題には積極的に支援をしていくことが必要であると考えられた。

はじめに

現在、わが国における10代の出産は2017年で年間9,898件、出生数全体に占める割合の1.04%である。急増する児童虐待における子どもの死亡事例報告では、リスク要因として若年妊娠が挙げられ

ている。また、日本における子どもの貧困率は13.9%で、おとながひとりの世帯の場合の子どもの貧困率は50.8%である(2015)。子育てにおいて危機的な状況に陥りやすい2つの要因を持ち合わせているのが、「10代で妊娠・出産した母子世帯」である。

日本における10代の妊娠出産の研究は、医学的視点から始まり、その後若年妊産婦めぐる社会的・心理的状況、2000年代以降は増加する児童虐待の背景の望まない妊娠、子育て支援、親支援という点から、最近では女性の貧困と10代の子産(佐藤2016)、10代の若者という視点(上間2016)で若年(10代)妊娠出産の研究が行われているⁱ⁾。また、母子世帯についても子どもの貧困や経済的不利な状況などをはじめとした調査研究が行われているⁱⁱ⁾。

本研究の対象である10代出産母子世帯については今まで十分明らかにされていないⁱⁱⁱ⁾ため、本研究で、10代出産母子世帯の現在と過去の状況や意識についてアンケート調査とインタビュー調査を行い、分析する。10代出産母子世帯の状況を明らかにし、今後の支援の充実に活かしていくことを目的としている。

今回、調査をおこなった沖縄県では、10代の子産割合が2.6%(10代子産者数437人/2016年)と全国的の2倍で、ひとり親と子どもの割合においても12.7%(70,796世帯/2015年)と発現率の高い沖縄県においては、10代で子産した母子世帯は出現しやすい状況にある。

また、2016年度(平成28年度)から沖縄県の子どもを取り巻く厳しい状況を踏まえた緊急措置として、子どもの貧困問題について地域が集中的に取り組む「沖縄子どもの貧困緊急対策事業」(以下、緊急対策事業)が実施されている。貧困状態で暮らす子どもの多くが、子どもの成長や発達に影響を及ぼすことが懸念されるということで沖縄県においても克服すべき課題として位置付けられている。緊急対策事業の中で、平成30年度は若年妊産婦(おおむね18歳以下の妊産婦)を対象にした居場所(出産育児の相談・指導、家計管理に対する助言、就労のための支援など安定した生活を営むための自立支援を行う)の運営支援に事業費が交付されるなど若年妊産婦の支援は沖縄県にとっても重要な課題となっている。

I. 沖縄県における母子世帯と10代子産をめぐる状況

① 沖縄県における母子世帯の状況

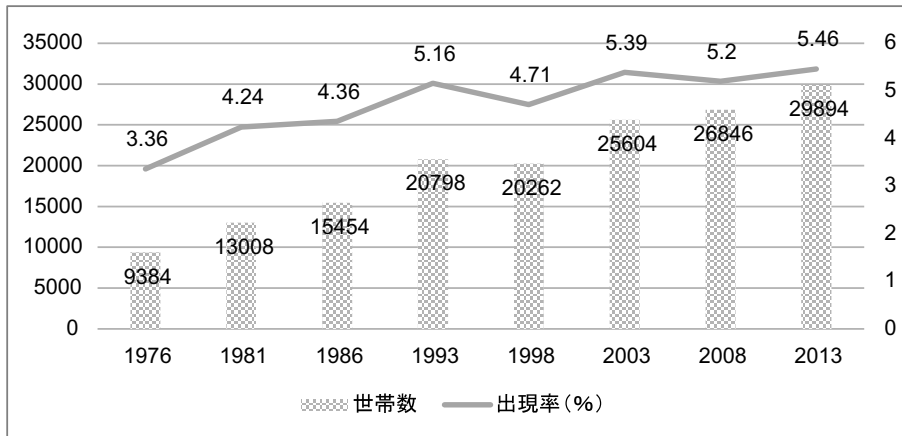
日本の子どもの貧困率は13.9%で、おとながひとりの世帯の場合子どもの貧困率は50.8%となり、ひとり親家庭の子どもの2人に1人が貧困状況にあるという結果が出ている(『平成28年国民生活基礎調査』厚生労働省^{iv)})。沖縄県では子どもの相対的貧困率は29.9%で、全国平均の約2.2倍(全国1位)にのぼり、4人に一人が貧困状態にあるということになる。おとながひとりの世帯の場合、子どもの貧困率は58.9%(平成25年)であり、全国よりも子どもの貧困の状況は深刻である。

『全国ひとり親世帯等調査』(2016年)(厚生労働省)によると、全国の母子世帯数は123.2万世帯(推計)で、児童扶養手当を受給している母子世帯は905,273世帯^{v)}であった。平成30年7月において母子世帯の87,012世帯が生活保護を受給している^{vi)}。母子家庭の一世帯当たりの平均所得金額は

290.5万円で、全世帯当たりの平均所得金額（560万円）の約半分と厳しい状態となっている^{vii)}。母子世帯の母親が「生活が苦しい」と感じていること^{viii)}、困っていることに「家計」と挙げている家庭が半数いる状況が明らかになり^{ix)}、母子家庭の状況が経済的にも、精神的にも深刻化している状況がみられる。

沖縄県において、母子世帯は29,894世帯で、全世帯の総数からみた母子世帯の出現率は5.46%となっている（平成25年度^{x)}）。母子世帯の出現率は1976年では3.36%であったが、1990年代前半から5%になった。1990年代後半には5%を割ることもあったが、2000年以降5%を超え続け、近年では、5.5%に近づいている（図1）。母子世帯の年間就労収入は155万円で、全国の母子世帯の年間就労収入の181万円よりも25万円近く低い状況にある。また、沖縄県の母子世帯の約7割が年間就労収入200万円未満で^{xi)}、家族の収入や各種手当によって支えられている状況がみられる。沖縄県において、児童扶養手当を受給している母子世帯は、19,771世帯いる（平成30年）、就学援助率は、20.1%（平成26年）で全国（15.4%）よりも割合が高い状況にある。

図1 沖縄県の母子世帯と出現率(%)の推移



『沖縄県ひとり親世帯等実態調査 平成25年度』より作成

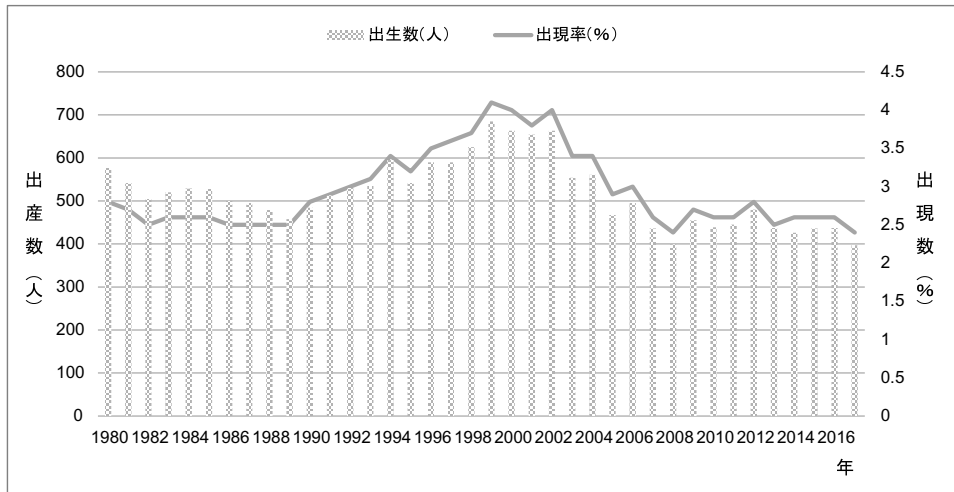
② 沖縄県における10代出産の状況

沖縄県の合計特殊出生率は1.94（平成29年/全国平均1.43）で全国において最も高く、また、19歳以下の若年出産出現率においても2.4（平成29年/全国1.0）で全国において最も多い^{xii)}。

全国の10代出産の状況は、1955年には約2.5万人で、その後は1~2万人の間を推移し、近年では1.1万弱で、2017年には1万人をきった。10代出産の出現数をみると、1960年代から1.2%程度を推移し、現在は1%（2017年）になっている^{xiii)}。

沖縄県の10代出産の推移をみると、1980年には2.8であった10代出産の出現率が、1990年代前半から上昇し始め、最も10代の出産が多かった1990年代後半には、25人にひとりが10代で出産するという状況もみられたが、2000年代半ばには10代出産の出現率が3以下となり、現在（2017）で

図2 沖縄県の10代出産数と出現率



人口動態統計より作成

は、2.4 となっている (図 2)。

Ⅱ. 研究方法

(1) 調査の趣旨・目的

子どもの将来のために必要な子育て環境を確保するため、10代出産母子世帯がどのような思いで暮らしているのか、また暮らしていたのかを把握し、過去から現在までの課題を把握することで、今後の10代出産母子世帯への支援の方策の検討の基礎資料とする。

(2) 調査対象・方法

アンケート調査は、沖縄県6市町村に居住する児童扶養手当受給資格者で、児童扶養手当の現況届の提出時(8月1日~8月31日まで)に窓口にて「平成29年度ひとり親へのアンケート調査」用紙を手渡しで配布した。アンケート用紙は配布時に記載してもらい回収した(アンケート用紙は、6市町村合計1633世帯へ配布、回収は767枚、回収率46.9%)。そのうち、今回の調査研究対象者は、10代で第1子を出産した母子世帯であるため、アンケート調査の回答者のうち、第1子を10代で出産した母子世帯81名である^{xiv)}。

また、インタビュー調査は、沖縄県6市町村に居住する、10代で出産したシングルマザー4名に対して、半構造化面接を行った。

（3）調査内容

1. 現在の状況（生活の気持ちの余裕、生活満足度、心配事、相談相手）、2. 第一子出産時の状況（心配事、相談相手など）、3. 小学生の頃の状況（心配事、相談相手、地域とのかかわりなど）、4. 本人の属性など4項目について質問している。

倫理的配慮

アンケート調査に目的と答えたくない質問には答えなくてもいい旨を記載した。アンケート調査の実施方法、内容等にあたっては、「熊本学園大学『人を対象とする研究』に関する倫理委員会研究活動適正化委員会」に審査を申請し、許可を受けている（平成29年7月10日）。アンケート回答者について記名はせず、得られたデータについても、個人が特定できない形で使用している。

また、インタビュー調査において、熊本学園大学『人を対象とする研究』に関する倫理委員会研究活動適正化委員会」に許可を得ている（平成28年7月18日）。調査対象者に対して、事前に協力の承諾を得たうえで、インタビュー時にインタビュー同意書に書類に記載された質問事項について説明をし、答えたくない質問について答えなくてもいいこと、インタビューを中断してもいいことなどを口頭で説明をし、インタビュー同意のサインを得て実施している。

Ⅲ. 研究結果と分析

1) アンケート調査結果と分析

基本的属性

今回の調査に回答した10代で出産した母子世帯は81名で、母子世帯506名中の16.4%を占める。10代で出産した母子世帯の母親の平均年齢は33.7歳で、20代以上出産母子世帯の平均年齢（39.8歳）より6.1歳若い。

現在の暮らし感

現在の生活について「ゆっくりのんびりできているか」について聞いた。日頃ゆっくり「できている、まあできている」と回答した10代出産母子世帯は54.3%であり、「あまりできていない」、「できていない」と回答した者が42.8%であった。ゆっくりのんびりできない理由として、「時間がない」（83%）、「気持ちのゆとりがない」（33.3%）と回答している。10代出産母子世帯は20代以上出産母子世帯（42.3%）より12%ゆっくりのんびりできていると感じていた（図3）。

また、現在の生活について「満足しているか」について聞いた。「満足、だいたい満足」と肯定的に回答した10代出産母子世帯には54.3%であり、「少し不満、不満」と否定的に回答した者が37.3%であった。10代出産母子世帯は20代以上出産母子世帯（50.6%）より生活の満足が3.7%高かった（図4）。

図3 日頃ゆっくりのんびりできているか (%)

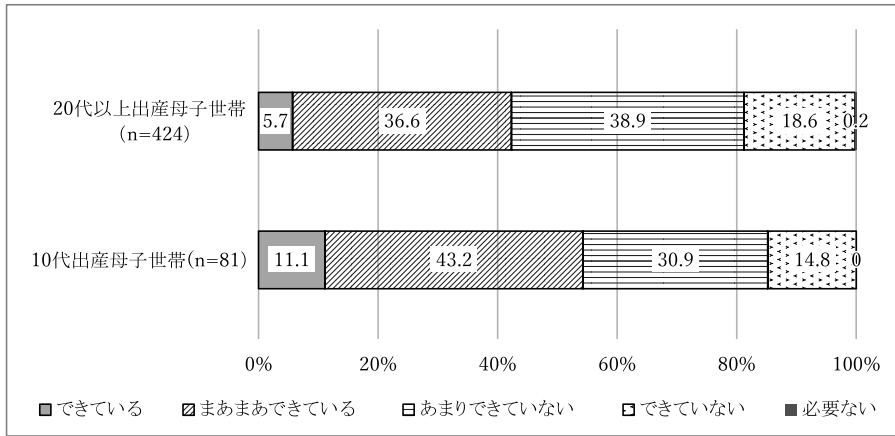
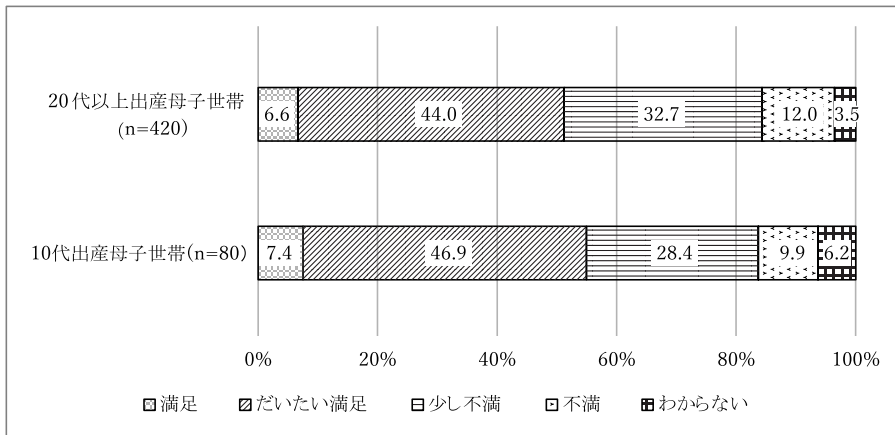
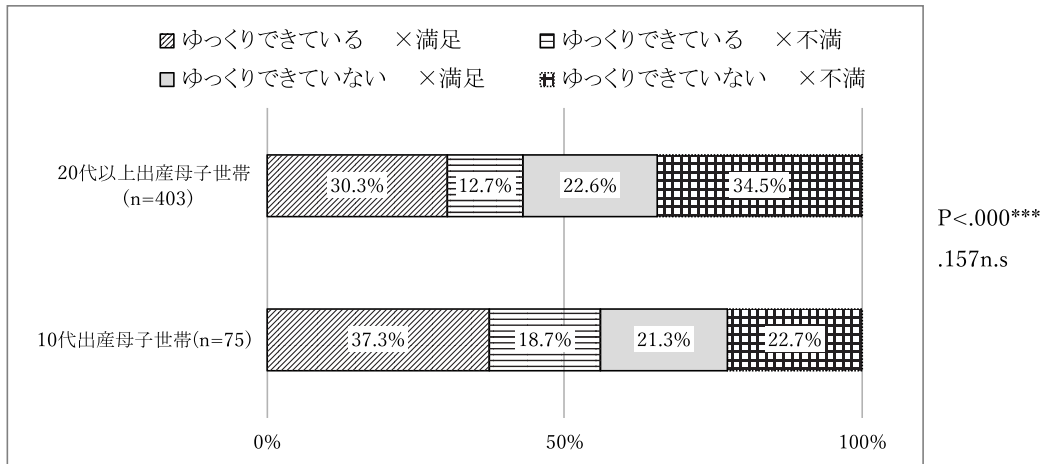


図4 現在の生活に満足しているか (%)



現在の生活において「ゆっくりのんびりできているか」と現在の生活の満足感に関してクロス分析した。10代出産母子世帯はゆっくりできているし、満足していると回答した人が4割弱いた。また、10代出産母子世帯は20代以上出産母子世帯に比べて、ゆっくりできていないし不満であると回答している人が13%少なかった。20代以上出産母子世帯においては日頃ゆっくりにできているかと生活への満足感に関連性が見られ、ゆっくりにできていない人が不満であるという傾向がみられたが^{xv)}、10代出産母子世帯においては関連性が見られなかった(図5)。

図5 出産時期に見た日頃の生活感（ゆっくりと満足）



頼れる人の存在とくらし感

現在、頼りになる人がいるかどうかについて聞いた。10代出産母子世帯は92.5%が頼りになる人がいると回答し、20代以上出産母子世帯（87.4%）より5.1%高かった（図6）。

頼りになる人がいることと日頃「ゆっくりできているか」についてクロスすると、頼りになる人がいる51.9%は日頃ゆっくりのんびりしていると回答している。一方、頼りになる人がいるものの39.5%が日頃ゆっくりできていないと回答している（図7）。

頼りになる人がいることと現在の生活に「満足しているか」についてクロスすると、頼りになる人がいる54.7%が現在の生活に満足していると回答している。一方、頼りになる人がいるものの38.7%が生活に満足していないと回答している（図8）。

図6 頼りになる人の有無

	10代出産母子世帯 (n=80)	20代以上出産母子世帯 (n=419)
頼りになる人いる	92.5%	87.4%
頼りになる人いない	7.5%	10.3%
必要ない	0.0%	2.4%

図7 10代出産母子世帯 頼りになる人がいる×ゆっくりできているか

10代出産母子世帯	ゆっくりしている	ゆっくりしていない
頼りになる人いる (n=74)	51.9%	39.5%
頼りになる人いない (n=6)	2.5%	4.9%

図8 10代出産母子世帯 頼りになる人がいる×満足しているか

10代出産母子世帯 (n=75)	生活に満足傾向	生活に不満傾向
頼りになる人いる (n=70)	54.7%	38.7%
頼りになる人いない (n=4)	2.7%	2.7%

現在の心配ごと

現在の心配ごとについて聞いた。10代出産母子世帯の約7割が現在の心配ごとに「経済的なこと」(69.1%)を挙げている。次いで、「子どもの将来」(25.9%)、「自分の体調」(22.2%)となっている。10代出産母子世帯は、「経済的なこと」については20代以上出産母子世帯(69.2%)と同様の傾向にあるが、20代以上出産母子世帯と比べて、「子育て」においては10.1%少なく、「子どもの将来」においても9.4%少なかった(図9)。

図9

	経済的なこと	子育て	家事	仕事	人間関係	自分の体調	自分の育った家族との関係	自分の将来	子どもの将来	パートナーとの関係	その他	心配ごとはない
全体 (n=506)	69.2%	28.3%	6.9%	25.3%	3.8%	19.8%	4.2%	10.5%	33.8%	0.8%	2.6%	6.5%
10代出産母子世帯 (n=81)	69.1%	19.8%	8.6%	21.0%	1.2%	22.2%	6.2%	6.2%	25.9%	0.9%	2.5%	8.6%
20代出産母子世帯 (n=425)	69.2%	29.9%	6.6%	26.1%	4.2%	19.3%	3.8%	11.3%	35.3%	0%	2.6%	6.1%

注：網は全体平均よりも高い数字

日頃のゆっくりのんびり感と心配ごと

「日頃ゆっくりできているか」の問いと現在の心配ごとの項目をクロス分析した。10代出産母子世帯においてどの心配ごとの項目でも、ゆとりがないと回答している割合が50%を超え、中でも「自分の育った家族との関係」、「家事」、「自分の将来」を心配ごとと回答している人の8割以上がゆとりがない傾向にあった。(図10)。

日頃の満足と心配ごと

「満足感」の問いと現在の心配ごとの項目をクロス分析した。10代出産母子世帯において、「経済的なこと」と回答していた半数が生活に満足と回答し、「経済的なこと」以外の項目では、現在の生活が満足でないと回答している割合が50%を超えている。中でも「自分の育った家族との関係」、「仕事」を心配ごとと回答している人の7割以上が満足でないと回答していた。(図11)。

図 10 心配ごととゆとり（10代出産母子世帯 心配ごと項目とゆとり）

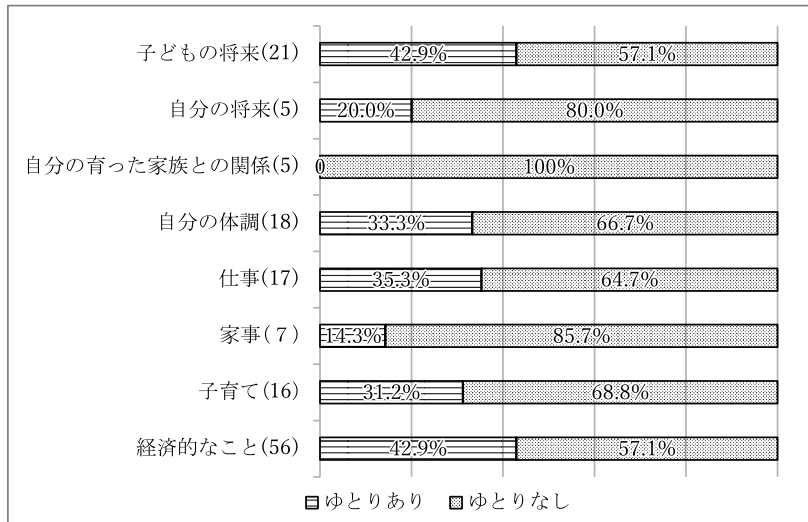
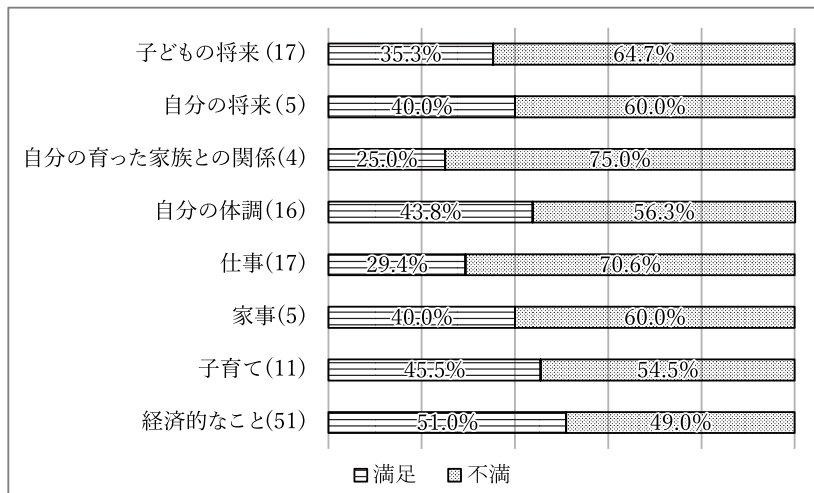


図 11 現在の心配ごとと満足（10代出産母子世帯 心配ごと項目と満足）



第1子出産の頃と現在の心配ごとについて

10代出産母子世帯は親になってあきらめたことが「ある」と23.5%が回答し、母子世帯全体(27.1%)よりも低い結果となった。あきらめたことの内容は「なりたい職業」、「仕事」、「学校」であった。

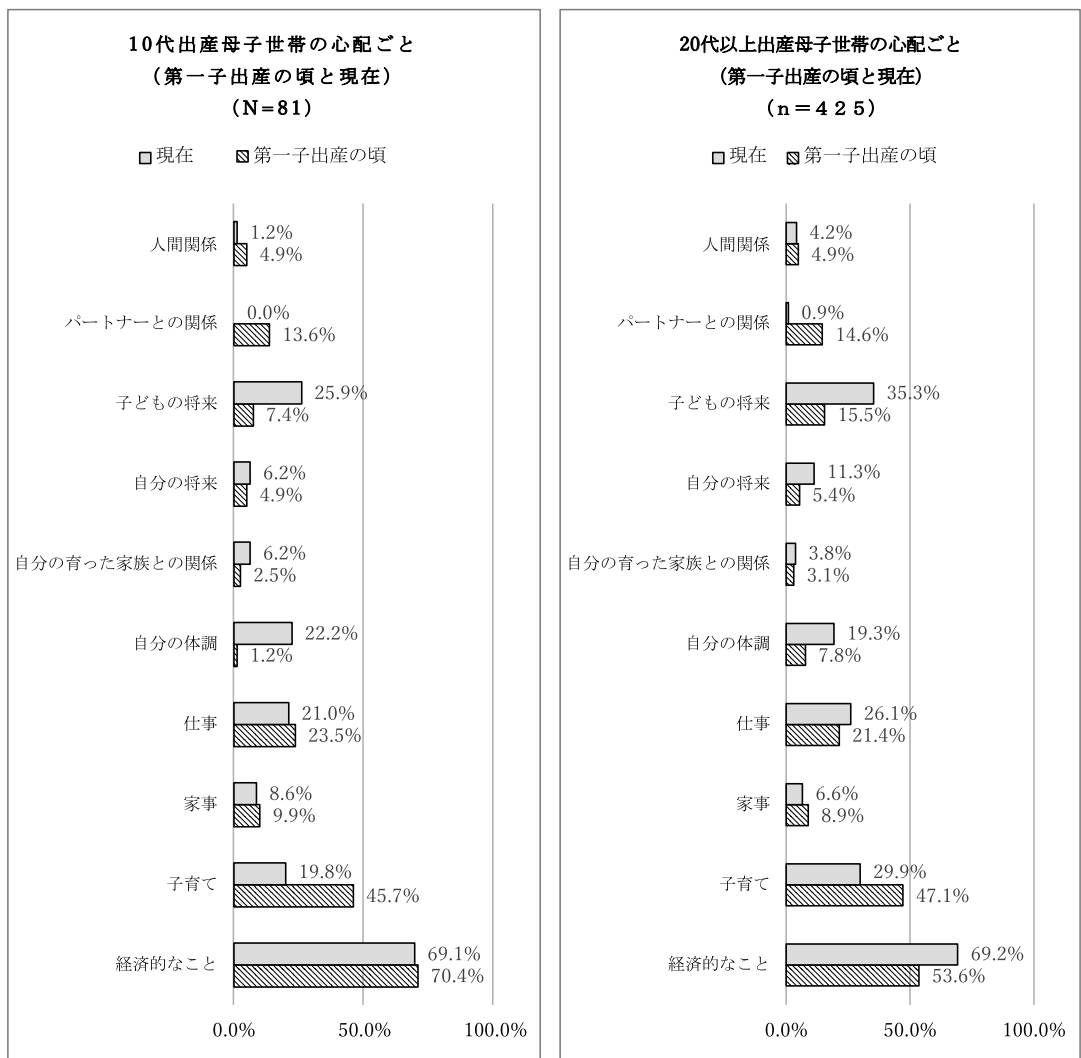
10代出産母子世帯が第一子出産のときの心配事としては、「経済的なこと」(70.4%)、「子育て」(45.7%)、「仕事」(23.5%)であった。20代以上出産母子世帯は、「経済的なこと」(53.6%)、「子育て」(47.1%)、「仕事」(21.4%)であった。第一子出産の頃、10代出産母子世帯のほうが「経済的な

こと」を心配している状況が見られた。

10代出産母子世帯において、第一子出産のときと現在の心配ごとの変化をみると、心配ごととして増えたのは「子どもの将来」、「自分の体調」の項目であった。20代出産母子世帯においては、「子どもの将来」が19.8%、「経済的なこと」が15.6%増加している。一方、10代出産母子世帯において、心配ごととして減った項目は、「子育て」、「パートナーとの関係」であった。割合が変わらないのは、「経済的なこと」、「仕事」であった。

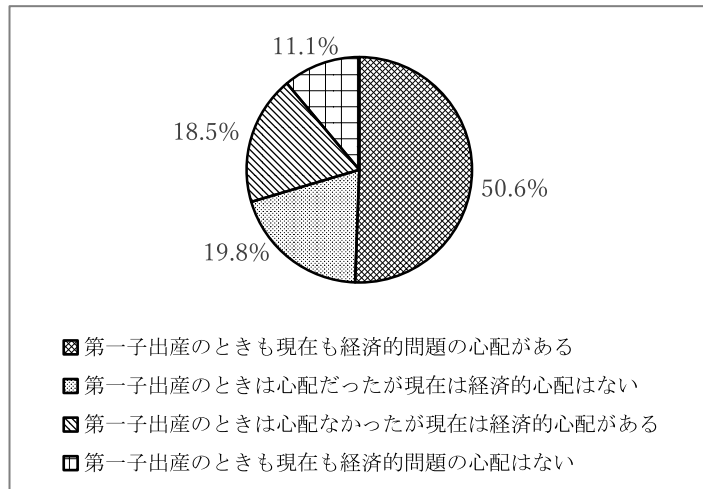
10代出産母子世帯は20代以上出産母子世帯と比較すると、現在の心配ごととして「子どもの将来」、「子育て」を心配している割合が10%低い。(図12)。

図12 10代出産母子世帯と20代以上出産母子世帯の心配ごと(第一子出産の頃と現在)



10代出産母子世帯は、第一子出産時現在ともに約7割が経済的な課題を抱えている状況が見られる^{xvi)}。第一子出産時から現在まで経済的なことを心配していない人(11.1%)や第一子出産のときには心配だったが、現在は心配ごとになっていない人(18.5%)いるものの、出産後に心配ごとになった人(19.8%)や第一子出産時から経済的な心配ごとを変わらずに抱えている人(50.6%)がいる(図13)。

図 13



小学生の頃の様子

「小学生の頃心配だったこと」について聞いた。10代出産母子世帯は、心配ごとについて、「友達関係」(35.8%)、「勉強」(28.4%)、「親のこと」(24.7%)と挙げている。20代以上出産母子世帯と比較すると、10代出産母子世帯は「親のこと」が12%、「友達関係」が8%多い(図14)。

10代出産母子世帯の約4分の一が心配だったと回答している「親のこと」について、10代出産かそれ以外の出産かの違いで、「親のこと」を心配していたかについて関連性を見るために χ^2 検定を行ったところ、10代出産母子世帯は20代以上出産母子世帯より小学生の頃「親のこと」を心配していたと解釈することができる。

心配ごとと親のこと

小学校の頃、心配ごとについて誰かに相談したかと聞いた。10代出産母子世帯は「相談した」18.1%、「相談しなかった」59.7%と回答した。20代以上出産母子世帯と比べると、「相談した」とする回答は5.3%低く、「相談しなかった」は14.1%高かった(図15)。

また、10代出産女性のうち小学生の頃「親のこと」の心配している人が、心配ごとを誰かに相談したどうかについて連関性を見るために χ^2 検定を行ったところ、親のこと心配しているほうが心配していない人よりも心配ごとを相談しなかったと解釈することができる(図16)。

図 14 小学生の頃心配だったこと×10代出産母子世帯・20代以上の出産母子世帯

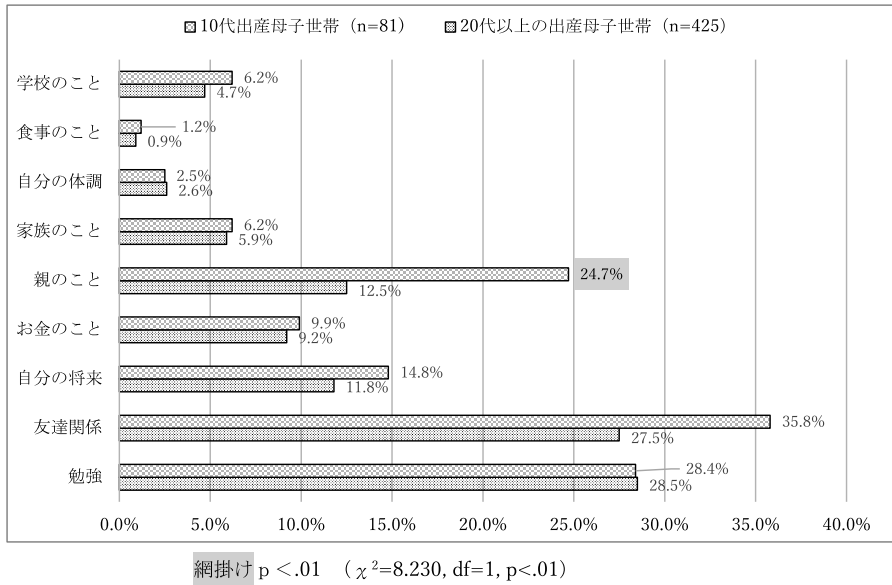


図 15 小学生の頃心配ごとの相談 (%)

	した	しなかった	必要なかった	わからない
10代出産母子世帯 (n=72)	18.1%	59.7%	13.8%	8.3%
20代以上出産母子世帯 (n=338)	24.5%	45.6%	14.2%	15.6%

図 16 10代出産女性 小学生の時心配ごとと「親のこと」×「相談した」 (%)

	「親のこと」心配 (n)	「親のこと」心配でない (n)
心配ごとを誰かに		
相談した	10.0%	82.0%
相談しなかった	90.0%	18.0%
合計 (人数)	100 (20)	100 (61)

($\chi^2=10, 861, df=1, p<.01$)

10代出産女性のうち小学生の頃「親のこと」を心配しているかどうかで小学生の頃「お金のこと」を心配しているかどうかについて連関性を見るために χ^2 検定を行ったところ、親のことを心配しているほうが「お金のこと」を心配していたと解釈することができた(図17)。

図 17 「親のこと」×「お金のこと」 (%)

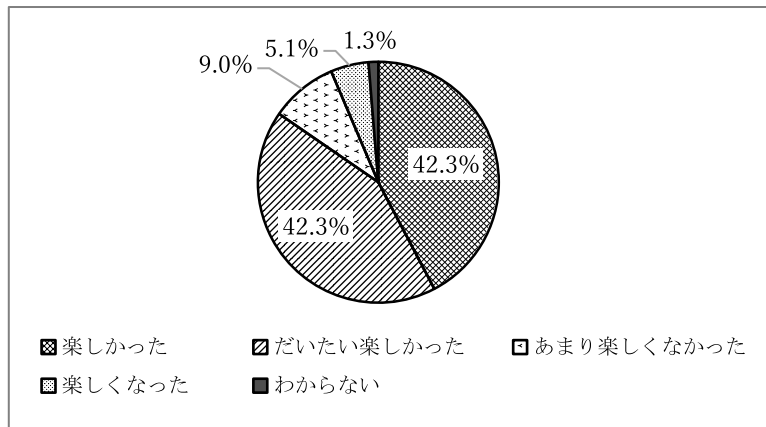
	「親のこと」 心配	「親のこと」 心配でない
「お金のこと」 心配	28.6%	2.7%
心配でない	71.4%	97.3%
合計 (人)	100 (21)	100 (75)

($\chi^2=12.082$, $df=1$, $p<.001$)

楽しさと心配ごと

10代出産母子世帯のうち、小学校の頃のことを「楽しかった」、「だいたい楽しかった」と回答した人は84.6%で、「あまり楽しくなかった」、「楽しくなかった」と回答をしたのは14.1%であった。20代以上出産母子世帯（楽しかった傾向83.2%、楽しくなかった傾向11.2%）と概ね同様であった（図18）。

図 18

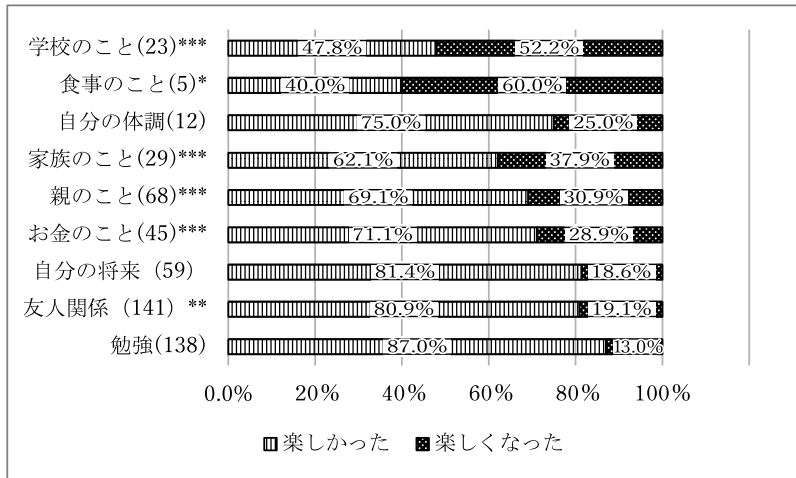


小学生の頃の楽しさと当時の心配していたことを母子世帯全体でのクロス分析を行った（図19）。「勉強」は小学校の頃の楽しさに影響が少なかった。「家族のこと」、「親のこと」、「お金のこと」、「学校のこと」は、楽しさに関連がみられた。特に子ども自身の項目よりも、子どもの家庭に関する項目のほうが小学生の頃の楽しさに関連していた。

このアンケート調査結果より、10代出産母子世帯においては、日頃の生活において20代以上の出産母子世帯よりもゆっくりのんびりしているという結果がみられたが、20代以上出産母子世帯と異なり、頼りになる人がいることが、「ゆっくりのんびりできていること」や「生活の満足」に関連していないことが分かった。

また、小学生の頃心配ごとを相談しなかった人は、第一子出産のときに「頼らなかった」、「頼る人

図 19 母子世帯 小学生の頃の楽しさと心配ごと



*p<.05, **p<.01, ***p<.001

がいなかった」と回答する傾向があり、小学生の頃心配ごとを相談できないという状況が、第1子出産のときにもだれにも頼らない、頼る人がいないという状況につながっていることがわかった。

さらに、10代出産母子世帯の半数が、「経済的なこと」の心配ごとを第一子出産のときから現在まで抱えている。また、「親のこと」を心配していた人は、「お金のこと」を心配しており、「親のこと」を心配している背景に経済的なことがあることがわかった。そして、小学生の心配ごとが、小学生の頃の楽しさに影響し、中でも家庭に関する事柄が、小学生の頃の楽しさに影響していたことがわかった。

2) 10代出産シングルマザーへのインタビュー調査結果

インタビュー調査について沖縄県6市町村に居住する10代出産女性4名の事例を紹介する。経済的状況や親子関係について、下線を引いた。

図 20 インタビュー回答者の属性

回答者	属性				
	年齢	出産年齢	子どもの年齢	ひとり親の状況	職業
A	22歳	19歳	2歳	未婚	看護師(非正規)
B	19歳	17歳	1歳7か月	未婚	無職
C	22歳	19歳	2歳	離婚	就労支援A型
D	17歳	17歳	3か月	未婚	無職・通信高校在学

以下、10代で出産した母子世帯のインタビュー調査である。

図 21

	Aさん	Bさん
●出産までの状況	<p>高校卒業後の18歳から介護の仕事をして19歳の時に出産(相手23歳)。相手とは、付き合っていただけで、妊娠がわかった妊娠2か月から子どもが生まれて現在まで連絡が取れない。子の父は認知していないし、養育費もなし。<u>子の父は当時働いていなかった。</u></p>	<p>最初の出産17歳(相手17歳、学年は一つ下)高校3年の時に妊娠がわかり、在籍していた普通高校から通信高校へ転校した。転校については学校から打診された。高校3年の11月頃に転校し、高校3年の2月に出産。高校の編入に関して特に問題はなかった。通信高校で卒業した。自分の家族構成、母、弟二人(高1、中1)、妹1人(小5)。自分が中学の頃である5、6年前に両親が離婚。母子家庭で育つ。</p>
●現在の暮らし	<p>現在、実家で父、母、弟(高校生)、自分と子どもと5人で同居。精神的な支えは、自分の母親と職場の後輩。家計は親とは別生計。<u>自分の収入は以前からしていた介護の仕事(非正規1年雇用)で、育休が取れなかった</u>ので、産休明けた産後2か月から職場復帰した。車で通勤している。</p> <p>現在の収入 月12.3万 ボーナス3万 児童扶養手当、保育料(無料)。健康保険、雇用保険、年金もはらっている。</p> <p>現在の支出 車のローン・車の保険・生命保険(自分)などあわせて3万5千円、携帯代1万3千円、食事代2-3万、おむつ、ミルク、ガソリンなどがかかり貯金はできない。子育ては保育園も入れたので問題はない。家事も母と分担している(主に母 食事・洗濯など)。母親は育児を手伝ってくれる(母が子どもを見てくれたときは母にお金を渡している)。弟が遊び相手をしてくれる。相手の親のサポートはない。</p> <p>今の楽しみは月1回友達と遊ぶことだが、最近では友達が結婚したりして以前と比べて友達と会わなくなった。</p>	<p>子どもを産んだ後実家で暮らしていた。20歳になったら結婚の予定(<u>自分の母は結婚を反対している</u>)。現在自分は仕事をしていない。5か月前から子の父の実家で同居を始めた。同居の家族は、自分(19歳)、自分の子(1歳7か月)、子の父(19歳)、子の父の母、子の父の妹2人(中3、中1)の6人。子の父の実家で暮らすようになった理由は、今後2人も結婚する予定で、出産も控えている(妊娠9か月)ので落ち着いて暮らせるように。最近、切迫流産で1か月の入院していた。この1か月で、子どもが母親以外にもかかわるようになった。子の父は、子どもが生まれたのちは高校に在学しながら居酒屋のバイトしていた。今年の3月に高校を卒業し、<u>保育補助の仕事(1年契約)</u>をし、月14万の収入、いろいろと引かれたら11万くらいの収入。これから子ども生まれるから、居酒屋のバイトもしようかと思っている(子の父)。保育料はまだない。子の父の実家に3万円をいれ、ケータイ代、子どものおむつミルク、入院費、通院費でお金はなくなる。同居前まで児童扶養手当をもらっていた。</p> <p><u>現在の生活は、子の父の母の収入で行われている</u>。家事は、子の父の母が主にしている。食事をつくるのは子の父の母が行っていて、サポートする形で家事を行っている。ゴミ出ししたり、洗い物があったら洗い物をしたりしている。4月に保育園入園予定で、それを機に働くつもり。生活は7時に起きて、子どもと一緒に寝てという生活。自分の親も、子の父の親もサポートしてくれている。子どもは自分がいなくても自分の実家にお泊りができる。<u>子育てについて、食事とかしつけとか気にしていない</u>。子の父は、健康保険は職場の雇用保険、厚生年金に入っている。子の母は国保に入っていて、年金はまだ払っていない。子の母の母に扶養されている。現在使用しているサービスは、保育園、児童手当、児童扶養手当(終わる予定)。サービスへの不満なことも特はない。</p>

<p>●困っていること</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・実家での暮らし 家を出たいと考えている。実家の近くにある公営住宅の申し込みをしたが落選した。また、申し込みをする予定である。<u>家にいることがストレス、自分の父親がうるさい。</u>自分の両親の夫婦喧嘩をしているときに、父が暴言を吐く。(例えば死ねなど) その暴言を子どもに聞かせたくない。 ・子育て 子どもも2歳でイヤイヤ期。ただ泣くだけということもあり、なんで泣くの?という時がある。対応が難しい時期なので、<u>家を出ると親の援助がなくなり怖い</u>という思いもある。また、<u>民間のアパートも高いので…、急いで</u>はない。 ・職場での子育てへの理解 仕事で、子どもが、病気になった時に自分の「親に看てもらえないの?」といわれたりする。子どもの体調の問題に対して職場の理解がない。 ・キャリアアップ 会社から3年間働くことを条件に介護の資格を促されている。収入も増やしたいので介護の資格を取りたいと考えている。ただ、<u>自分の両親は二人とも仕事をしている。父親は子どもの面倒は見てくれないし、母親はシフト制の仕事で休みがバラバラで、母親と休みを調整するのが難しいので、しばらくは自分の資格を取るの</u>は難しいと思う。 今後、パートナーは欲しいけど、今はいない。結婚して子どもが欲しい。大家族になりたい。子どもには習い事(ピアノや英語、サンシン)をさせたい。自分が習い事をできなかったから、自分も今から沖縄の舞踊がやりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子育て 入院をする前は、子どもは自分にしかつかないという状況であった(子の父にもなっていない状況)が、1か月入院した後は、パートナーを含めて周りのみんなに慣れていった状況であった。<u>回りが見てくれて子育てで困ってはいない。</u>(むしろ自分では子どものかかわりを決められていないような様子も見られた。) ・出産後の生活特に経済的なこと <u>子どもが産まれればおむつ代やミルクが二倍かかるので大変かと思っておむつが外れるようにしたい</u>と思っているが、特には何もしていない。
	Cさん	Dさん
<p>●出産までの状況</p>	<p>結婚19歳の時、出産の直前に入籍。入籍の前に里帰り。<u>経済的DV(子の父が働かないため)20歳の時に離婚。</u>子の父とは、高校3年から付き合っていて、高校卒業後の就職先を彼の家のそば(村外)で仕事を探した。仕事に就いたが、<u>妊娠したため仕事を辞めた(就職後2か月)。</u>その後彼の祖父母宅(子の父には父母はいない 就職先と別の市)で暮らすことになった。祖父母宅はごみ屋敷であった。ごみ屋敷を片付けたりが、なかなか片付かなかった。<u>自分が高校生の時に貯めていたお金は、就職活動や子の父がパチンコで使ってしまった。</u>妊娠がわかったが<u>お金がなくて病院に行けない。お金もなくお風呂にも</u></p>	<p><u>母親、姉二人とも10代で出産。</u>一人の姉は夫と近くの団地に暮らす。一人の姉は本人と同じように未婚である。 最初の出産17歳(相手20歳 仕事をしていなかった。現在はリサイクルの仕事をしている)通信高校在学中(もともと学校は嫌いだったので通信高校に進学した)。再来年2月卒業予定。 妊娠前、コンビニ・居酒屋月10-15万稼いでいた。2017年6月までかけもちで仕事をしていた。妊娠が4か月でわかり、2018年1月(妊娠5か月頃)E市(パートナーの実家)へ行った。妊娠はたまたま。自分はいれなかった。相手はびっくりしていた。自分</p>

	<p>入れない状態で身なりも悪く外に行けない状態。相手は働いていなかった。妊娠中お金がなくて、彼のおじさんがコンビニの店長だったことで廃棄前のお弁当をもらって食べていた。その後、妊娠中、妊娠中毒症となった。</p> <p>(地域包括支援センターの人が、彼の祖父母宅を訪れた時に妊婦がいることに気づき、本人の実家の保健センターにつながることでになり公的な支援とかかわるようになった。) 出産の3か月前に授産制度利用。実家に戻って出産した。その後、保健師等とかかわる中、自分の障害(発達障害)のことが明らかになった。</p> <p><u>父親に3か月間だけ住まわせてほしいと頼み込んで住まわせてもらった。</u></p> <p>ひとり親になった理由は、子の父が働かないし、仕事が続かない。離婚について嫌だと言っていたけれど仕事をしないから。ひとり親になって困ったことは、お金がなかったこと。お金がなくて出産したから、出産後4か月ですぐに仕事を探して保育助手やデイサービスをしていた。</p>	<p><u>の親は自分でやるならいいと言われた。</u>相手の親は喜んでた。</p> <p>仕事を辞めてF市へ行き、その後仕事はしていない。そのときの生活費は相手の親。病院代は自分で。他のことにはバイトの貯金を使っていた。パートナーとは経済的価値観が合わなかった。パートナーと別れて2018年4月から5月に自分の実家へ戻る。パートナーは認知している。<u>養育費を払ったのは最初だけ、今は払ってもらっていない。</u>別れるとき養育費を払うなら子どもに会わせるという約束だったから、子どもとは会わせていない。子の父とは連絡を取っていないが、子の父の親とはたまに連絡をとる。</p>
<p>●現在の暮らし</p>	<p>実家暮らし。祖母、父(有職)、叔父(無職)、自分、娘(2歳)で5人暮らし。朝7時に起きて、夜12時過ぎに寝る。インターネットをしていて寝るのが遅くなり朝起きれない。寝不足。保育園に遅れることもある。生活リズムを規則正しく計画的にしたいと思っている。子どもは自分になついている。子育ての知識や情報は、担当の保健師から得ている。家事や育児は、朝ごはんは自分か父親、夕飯は祖母。保育園の送りは、村の養育支援事業を利用して、迎えは基本的に自分が行っているが、雨の日とか、仕事があるとき、荷物が多い日などは父親が迎えに行っている。子の父に養育費のことで連絡したが連絡がない。仕事は、障害者就労支援A型で契約として働いている。4時間で月6万程度。内容も好きだし、人間関係も良くて、今の生活の楽しみの一つ。収入は 最低賃金×4h×日数、児童扶養手当、児童手当、来月から障害年金が入る。お金の管理が難しく社協の権利擁護の支援を利用して。また他に利用しているサービスは、保育所(月6400円)、村の養育支援(平日の保育園の送り)、毎週日曜日自分の部屋の片づけのヘルパーなどを利用している。今楽しいことは、月1回ほど近隣に住む中高の時の友だちと会うこと(友達は独身)。お酒飲まない。</p>	<p>実家暮らし(今の住まいは10年くらい住んでいるところ)。自分の母、姉、姉の子(2歳)、自分(17歳)、自分の子(3か月)で5人暮らし。母は介護士で10年くらい働いている。祖母は、同じ地区の、自宅から歩いて3分くらいの所に住んでいる。現在の暮らしの中では親が生活費を払っている。子どものものは今までの貯金(妊娠前にバイトしていたもの)、児童扶養手当、児童手当から出している。児童扶養手当や児童手当は、母親が手続きをしている。1万円家に入れて、携帯代、残りは貯金している。貯金をしているけれど、働いていないので増える予定がない。保育園が0歳児は受け付けていないので、子どもが1歳になるまで仕事ができない。自分の親にはいろいろサポートしてもらっている。<u>健康保険は自分の母親のものに子どもと自分入り、自分の母の扶養となっている。</u>雇用保険や年金はまだない。利用しているサービスはない。1か月に一度保健師の家庭訪問がある。毎日6時か7時に起きて、11時に寝ている。朝食は食べない、昼食は子どもが寝たら食べる。夕食は自分の親がつくってくれた時に食べる。子どもとはコミュニケーションが取れていると思う。よく遊んでいる。<u>子どものことは全部自分でする。</u>子どもの成長は特に心配なことはない。家事について、食事は母親、洗濯は自分のものと子どものものは自分で、全体のものはみんなで分担する。</p>

<p>●困っていること</p>	<p>・経済的に不安 収入8万で足りない時があった。今光熱費も家に払っていない状況。 ・子育て 子どもの夜泣き 免許を取りたい。免許を取って、<u>子どもと二人で暮らしたい</u>。ただ、今は免許もないので、現在保育園の送迎も自分だけではできていない状況なので、子どもと二人暮らしは難しい。生活費についても、どうにかやりくりすることと、相手から養育費をもらうことなどを考えている。 ・将来のこと 子どもが将来、学校に入り、高卒大学や専門学校に行きたいといった時のために貯金を頑張りたい。今は免許を取るお金を貯めている。権利擁護事業を利用して節約していきたい。誰かと将来付き合いたいとも思うがバツイチ子持ちなのでお付き合いなどに発展しにくい。</p>	<p>・ネットで誹謗中傷を受けることがある。ツイッターで子どもの写真を載せると、学校行っでなくて、考えないで産んで、という内容。シングルや未成年で産んでいる人をターゲットに批判してくる人がいて、時々つらい思いをすることがある。 ・今後のこと 高校を卒業すること。今後の仕事は特に希望はない。給料がある程度入り、バイクで行けるところであればいい。<u>20歳までに親のところから自立し、子どもと2人で暮らしたい</u>。今、付き合っている人はいない。今後はパートナーを新たにつくことや結婚は未知数。</p>
<p>その他</p>	<p>・親との関係 放任していた親。 子どもの時は 野生児という感じでいつも裸足だった。活発でどんどん先にいき友達を置いていくような感じ。部活もやっていた。勉強はほぼやっていない。おばあさんは母親代わり。なんでも自分の思ったことをもガンガンいう人だった。 <u>「自分のことは自分で」という家だった。</u> 親は、自分の時間を使われるよりお金(バス代)を払うような人。小学校の3年のとき部活で必要な運動靴を買いに行くのに自分で行くとお金だけを渡された。バスに乗ってE市に行き、店の場所も何にもわからないから結局迷って、古い店で前からそこに売っていても売れなかったような古くなった靴を買った。帰りのバスはどこから乗るのかわからず道路の標識(地名の書いている)をみて、ひたすら歩いて途中やっとなりに乗る家に戻ることができた。不安だったし、ほっとかかっていると思っていた。成人式のときも振袖もお金がなくてレンタルできなくて、スーツで出席した。 <u>そういう家で育ったから、落ち込んでも人に言わない。言わないのが染みついている。</u></p>	<p>・子どものときの暮らしについて 自分の母と父は、自分が2歳の時に離婚。母は19歳の時に出産。父親とは全く会わない。顔もわからない。連絡も取らない。 小学校の頃は学校に行き、成績もよかった。中学校になって、1年生と3年生の時に学校に行かなかった。中学校の時の担任に、「目つきが悪いから直せ」と言われて折り合いが悪くなった(小学生のころ仲良くしていた一人の子に中学1・2年生の頃嫌われて、いじめみたいになった。だから女子ではなく男子と遊ぶようになった。その友達は先生に気に入られていて、その子の話だけを聞き、担任が味方して、自分だけを叱るのに反発していた。その子はまだ近所にいる。今は普通)。中学の頃も勉強はできていたが、教室にいかなかった。2年生になってバレーボールの部活に行くようになって県大会までいったが、3年生になって部活が終わり学校に行く意味がなくなった。高校にはいかなつもりで、働くつもりだった。高校に行くとか行かないとかどっちでもいいから2学期くらいは同級生の子と夜遊んで、海とかお酒飲んだりしていた。結局通信制の高校に進学した。<u>この地域を出て一人暮らしをしたかった。</u></p>

今回のインタビュー調査から、10代出産シングルマザーは、出産前から子の父との交流、連絡がなく、子の父からの支援が受けられていない状況であった。現在の子育ては原家族からの物理的、精神的な援助なしには生活が成り立たない状況にある。特に収入においては生活できる収入が得られていなかった。また、誰かに頼らなくては子育てできない状況にあった。実家は、10代出産シングルマザーにとって支えではあるものの、居心地がいい場所とは必ずしも言えない状況が見られた。

IV. 考察

・頼りになる存在と日々の気持ち

若年妊婦や若年出産の場合は、特定妊婦^{xvii)}と判断され、出産前後に保健師をはじめとした地域の母子保健の専門家や地域の福祉課の支援を受けることが多く、身近に専門的な支援者との関係性を持っていると考えられる。そうした専門知識を持った専門家が身近にいるが、アンケートの調査結果では10代出産母子世帯は、頼りになる人の存在について、「家族」を挙げている^{xviii)}。10代出産母子世帯は、頼りになる人を86.5%が「母親」と答え、20代以上出産母子世帯(64.0%)と比べて20%以上の高い結果となっていた。

10代出産母子世帯においては、日頃の生活において20代以上出産母子世帯よりもゆっくりのんびりしているという結果がみられたが、20代以上出産母子世帯と異なり、頼りになる人がいることが、「ゆっくりのんびりできていること」や「生活の満足」に関連していないことが分かった。

インタビュー調査のなかでも、10代出産シングルマザーが頼りにしているのは家族で、特に自分の母親や父親であった。その生活をみると、10代出産シングルマザーの母親や父親自身も、現在も自分の子どもを育てていたり、フルタイム就労していたりして、生活にゆとりがなく、積極的に10代出産シングルマザーを支えられる状況ではなかった。

また、10代出産シングルマザーの育ちの過程をみると、アンケート結果からは、小学生の頃の心配ごととして、10代出産母子世帯の4分の1が「親のこと」を心配し、インタビュー調査から、子どもの頃から親が忙しく、親から放任され干渉されずに育った姿がみられた。このように、10代出産母子世帯の育った家庭の状況や10代出産シングルマザーとその親との関係からみると、10代出産母子世帯にとって、頼りになる人の存在である自分の母親や父親が、生活のゆとりや満足という日々の生活の思いを支えてくれているという意味での存在とは必ずしもいえなかった。

一般的に、子育て家庭が困難を抱えずに子育てをするための方法を考えるとき、家族はひとつの資源と考えられる。ただ、家族だからこそ、もともとある関係性をひきずり、難しさを抱えることがある。また、家族の問題は、周りも気づきにくく助けを求めにくいいため、問題が表明しにくいという課題ももつ。家族支援があれば孤立していない、安心して子育てできるとは必ずしも言えない現状がある。

このように考えると、10代出産母子世帯の支援を考えるときに、家族との関係に難しさを持つことはないのかという視点を支援者が持つことと、親族などの関係性に頼らない新しい関係のなかで子育てや彼女たち自身に対しての支援の仕組みが形成されることが必要だといえる^{xix)}。

・子どもの頃からの問題が解消されない

小学生の頃「親のこと」を心配している子どもは、心配ごとがあっても相談していないという状況がみられた。

小学生の頃心配ごとを相談しなかった人は、第一子出産のときに「人に頼らなかった」、「頼る人が

いなかった」と回答する傾向があり、小学生の頃心配ごとを相談できないという状況は、出産という支援の必要な時期にもだれにも頼らない、頼る人がいないという状況につながっていた。

また、10代出産母子世帯においては、「親のこと」、「経済的なこと」など家庭の中に心配を抱えている場合、相談していないという特徴を持っていた。子どもが心配ごとを誰も話さずにいる状況は、精神的な支援も社会にあるさまざまな支援も得られにくいことにつながる。特に家庭内の生活問題や経済的な問題を抱えている状況は、進学や就職、夢などの選択肢が狭められ、子どもの生き方や将来に影響を及ぼしかねない。

近年、子どもの貧困対策の一環として、沖縄県では子どもの支援員や子どもの居場所づくり事業が展開されている。小学生の頃からの人間関係を豊かにしていく取り組みは以前から行われてきたが、スクールソーシャルワーカー、子どもの支援員、子ども食堂など子どもの居場所など子どもの新たな環境と関係づくりが取り組まれ、子ども自身へ支援の情報を届ける情報提供の在り方も工夫されている状況にある。現在のこうしたとりくみに加えて、子ども自身が自ら自分で相談できる力をつける支援も必要であると考えられる。

また、「親のこと」を心配していた人は、「お金のこと」を7割が心配しており、「親のこと」を心配している背景に経済的なことがあることわかった。第一子出産時、現在ともに10代出産母子世帯の7割が「経済的なこと」を心配していた。経済的な心配ごとを第一子出産のときから現在まで解消されていない10代出産母子世帯は約半数いた。

「経済的なこと」が、「ゆっくりのんびりしている」や「生活の満足感」に関係していることがわかり、個人の充実した人生を生きるためにも「経済的なこと」への解決は必要なことといえる。母子世帯の貧困、子どもの貧困問題が社会で認知され始めた近年、ひとり親世帯に向けた支援が充実し^{xx)}、その結果、就業状況、正規雇用率、年間勤労収入も増加している^{xxi)}。

ただ、今回の調査結果を見ると、10代出産母子世帯は、精神的に人に頼れなかったり、子どもの頃から親の心配をしたり、家族との関係がうまく機能していなかったり、経済的な問題を抱えていたりする状況がある。また、10代出産母子世帯は、自分の進路、自分の仕事、自分の生活など自分の将来をどうやって生きるか自分の人生設計をする前に、子どもを産むということを人生の中で選択してきた。そのような特徴から、10代出産母子世帯における支援を考えるときに、子どもの頃など出産以前から抱えている個人の持つ解決できない課題を理解し、それを踏まえて今後のことを考え、子育てや就労、経済など一課題の支援ではなく総合的な視点をもって支援をするという、通常の支援よりもさらに寄り添った細やかな支援が必要と考えられる。

V. 本研究の限界と課題

本研究における対象である10代出産母子世帯は、今回の調査において母子世帯全体の16.4%で81名である。沖縄県の地方都市であることによって、家族に関する思い、衣食住などの生活費や子育てや子どもの進学への意識など都市部との違いが考えられる。また、今回の調査では、家族や子どもの

状況は明らかにされていない。今後は、育っている子ども調査などについても明らかにする必要があると考える。

おわりに

10代出産は、子どもへの不適切なかかわりや望まない妊娠や経済的不安定さなどの背景を持つことが多いため、特定妊婦として母子保健での支援の対象となっている。ただ、子どもが乳幼児を過ぎ、母親の年齢も高くなると対象から外れる。また、母子世帯への支援という大きな範囲の中では、10代出産は少数であるため、その課題は見えにくく、見過ごされてしまう。10代で出産した彼女たちの姿や家庭が見えなくならないようにすることが必要である。

今回の調査分析から、母親自身が子どもの頃からも抱えている課題が引き続いている状況も見られることから、現状への支援と同時に過去の状況や思いに寄り添った支援方法が必要である。そして、子どもの頃から子ども自身に対する支援を充実させていくことが、おとなになった時の課題を少なくさせることにつながると考えられる。したがって、学校や地域において家庭の問題を予防する対策や、子ども自身や家庭の課題が見えやすいような体制、また、出てきた課題には積極的に支援をしていくことが必要であると考えられた。

*本研究で調査にご協力いただいた皆様、アンケートを配布してくださった市町村の母子保健担当職員の方々、支援員の方々、国頭村の岸本美智子さん、貧困コーディネーター宇根美幸さんに感謝申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 JP16K04242 の助成を受けたものです。

注

- i) 詳細は出川聖尚子「10代出産家庭への支援に関する一考察」『社会福祉研究所報』第45号 2017. 3 p28において、日本の10代出産をめぐる先行研究は記している。
- ii) 母子世帯については、子どもの生活や将来に影響していることを生活保護世帯や貧困家庭についての研究から明らかとなっている。生活保護を受給している世帯が世代間連鎖をする可能性が高いこと（道中 2006）、子どもの進路や学力に影響を及ぼすこと（青砥 2009）、進路選択においても自ら低学歴になる進路を選択してしまう環境にあること（林 2012）などが指摘されている。また、母子世帯の研究においても母子世帯の子どもの自己肯定感が低い傾向にあること（清水 2011）なども明らかにされている。
- iii) 10代出産母子世帯については、筆者が行った熊本県ひとり親自立支援計画のアンケートを再分析した「10代母子世帯」に関する研究がある。
- iv) 平成27年の貧困線（等価可処分所得の中央値の半分）は122万円（実質値）となっており、「相対的貧困率」（貧困線に満たない世帯員の割合）は15.7%（対24年△0.4ポイント）となっている。
- v) 児童扶養手当受給者の母子世帯の主な内訳は（離婚 788,858世帯、死別 6,282世帯、未婚 101,724世帯）である。厚生労働省『平成30年度8月福祉行政報告例概況』

- vi) 厚生労働省 2016 年度『被保護者調査』、母子世帯の生活保護受給世帯数は平成 24 年度を境に年々減少傾向にある。
- vii) 厚生労働省『平成 29 年国民生活基礎調査』
- viii) 『平成 28 年度国民生活基礎調査』で現在の暮らし向きについて「大変苦しい」と感じている母子世帯が 45.1%で、全世帯平均の 23.4%に比べて比率が高い結果が出ている。
- ix) 『平成 28 年ひとり親実態調査』(厚生労働省)、『母子世帯の子どもを中心とした生活実態(ヒアリング)調査』(2010 全国母子寡婦福祉団体協議会)の中で母親のニーズとして挙げられている。
- x) 沖縄県福祉保健部『沖縄県ひとり親世帯等実態調査平成 25 年度』平成 26 年 3 月 pp4によると、全世帯からの出現率が示されている。
- xi) 前掲書 沖縄県福祉保健部 pp17
- xii) 厚生労働省『平成 29 年(2017)人口動態統計』第 4 表、出生上巻 4-5、中巻 5
- xiii) 出川聖尚子「10 代出産家庭への支援に関する一考察」『社会福祉研究所報』第 45 号 2017. 3 pp23-40
- xiv) 今回は回収されたアンケートのうち、第一子出産年齢が 10 代の人は 96 名(母子世帯 81、父子世帯 5、養育者世帯 2、無回答 3)いた。
- xv) 10 代出産以外の母子世帯は、「ゆっくりのんびりしているか」かどうかで生活の満足かどうかについて関連性を見るために χ^2 検定を行ったところ有意であった($\chi^2=37.967$, $df=1$, $p<.000$)。この結果を見ると、ゆっくりのんびりできているかと生活の満足度に関係し、のんびりできているほうが生活の満足感が高いと解釈することができる。
- xvi) 20 代出産母子世帯が、出産のときよりも経済的な課題を抱えている状況は、出産のときと母子世帯に新たになること、子どもの年齢が上がり学費などに費用がかさむことなど状況の変化が考えられる。20 代出産母子世帯は、「第一子出産のとき・現経済的に心配 38.8%」「第一子出産のときは経済的に心配 14.8%」「現在だけ経済的に心配 30.4%」「第一子出産のときも、現在も経済的に心配ではない 16.0%」となっている。
- xvii) 特定妊婦とは、「出産後の養育について出産前において支援を行うことが特に必要と認められる妊婦」(児童福祉法第 6 条 3)。平成 28 年 12 月に児童虐待対策の推進の「要支援児童等(特定妊婦を含む)の情報提供に係る保健・医療・福祉・教育等の連携の一層の推進について」の通知文が出される。「子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について(第 1 次～第 12 次報告)」において、心中以外の虐待による子どもの死亡事例が全体の約 4 割を 0 歳児が占めている。母親が妊娠期から支援者がいなくて孤立していること、産前産後の心身の不調があること、家庭において問題を抱えているなど考えられており、その問題を抱えやすい状況を持っているのが特定妊婦と考えられている。
- xviii) 10 代出産母子世帯は頼りになる人を「母親」(86.5%)、「兄弟姉妹」(55.4%)、「父親」(40.5%と挙げていて、20 代以上出産母子世帯は、「母親」(64.0%)、「兄弟姉妹」(57.4%)、「友人」(46.1%)であった。
- xix) 例えば『新しい社会的養護ビジョン』(2017)に示された「産前産後母子ホーム」のような親族に頼らない新たな関係性を構築できるような仕組みのことである。
- xx) 従来からの児童扶養手当などの母子世帯への支援に加え、平成 14 年(2002 年)に、ひとり親世帯へ「就業・自立に向けた総合的な支援」が始まった。平成 24 年(2012 年)は「母子家庭の母及び父子家庭の父の就業の支援に関する特別措置法」が成立し、各自治体でひとり親の自立促進計画が策定され、就業支援、経済的支援、子育て・生活支援、子ども支援など行われている。
- xxi) 厚生労働省『平成 28 年度全国ひとり親世帯等調査結果報告』収入状況 <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11920000-Kodomokateikyoku/0000188156.pdf> 就労状況 <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11920000-Kodomokateikyoku/0000188167.pdf>

参 考 文 献

- 岩破一博他「過去10年間の十代分娩の実態と臨床的考察」思春期学 Vol.10 No2 1992 p160-167
- 加藤治子ら「十代妊娠と支援のあり方」『産婦人科治療』66. p291-295. 1993
- 河野美江他「当院における若年分娩の臨床的検討」思春期学 Vol19 No1 2001 p101-104
- 戸田稔子他「若年妊娠の臨床的検討」『思春期学』Vol22 No3 2002-4 p392-395
- 林謙治「10代の妊娠および人工妊娠中絶」『周産期医学』Vol32 No 4 2002 p475-447
- 河野美江「10代で出産した母親における心理社会的困難性」『心理臨床学研究』第22巻 第1号 2004 p83-88
- 望月善子「10代妊娠の現状と問題点」『産婦人科治療』Vol91 No5 2005
- 村山陵子「文献にみる10代女性の妊娠・出産の支援の動向と課題」『思春期学』Vol23 No1 2005 p179-189
- 森田明美「10代の子育ての現状と福祉的支援の課題」『思春期学』Vol26 No1 2008 p134-139
- 定月みゆき「若年妊娠・出産・育児への対応」『母子保健情報第60号』2009年11月
- 大川聡子「10代の母親が社会化する過程において、顕在化する支援ニーズ」『立命館産業社会論集』第46巻第2号 2010.9 pp67-87
- 若林ちひろ「10代子育て家庭への妊娠期からの福祉的支援の現状と課題－児童福祉施設入所施設出身者、施設職員からの与察－『清和短期大学紀要第40巻』2011 pp7-16
- 田谷幸子「10代子育て家庭への妊娠期からの福祉的支援の現状と課題－施設ヒアリングの分析から－」『東洋大学人間科学総合研究紀要第14巻』2012 pp133-146
- 道中隆『生活保護と日本型ワーキングプア貧困の固定化と世代間継承』ミネルヴァ書房 2009
- 青木紀編著『現代日本の「見えない貧困」』明石書店 2003
- 埋橋孝文他編著『子どもの貧困/不利/困難を考える』ミネルヴァ書房 2015.8
- 財団法人全国母子寡婦福祉団体協議会『母子家庭の子どもを中心とした生活実態（ヒアリング調査）平成22年度』
- 大川聡子『10代の母というライフスタイル—出産を選択した社会的経験に着目して』晃洋書房 2016
- 佐藤拓代「女性の貧困と若年出産の現状」『公衆衛生』vol.80 No7 2016.7
- 上間陽子「私たちには見えない人びとの存在とそのネットワークのこと：沖縄の若年出産女性調査から」『世界』岩波書店 2018.9 pp78-93
- 岩田美香「ひとり親家族から見た貧困」『貧困研究 vol.3』明石書店 2009 pp22-33
- 清水冬樹「子どもの自己肯定感と家庭・親支援－母子世帯の実態を参考に－」『子どもの権利研究第19号』2011.日本評論社 pp17-23
- 林明子「生活保護世帯の子どもの生活と進路選択－ライフストーリーに着目して」『教育学研究』第79巻第1号 日本教育学会 2012 pp13-23
- 青木紀「貧困の世代的再生産の現状—B市における実態」『現代日本の「見えない」貧困』2003 明石書店 pp31-83
- 山西裕美他『ひとり親家庭における子育てと家庭生活についてのアンケート調査』集計結果報告書 2012
- 山田昌弘「貧困化する母子世帯－全国消費実態調査による母子世帯の経済的状況の動向」『アディクションと家族』26(2) 2009
- 阿部彩「母子世帯と子どもの貧困」『月刊自治研』596号 2009. P 34-40
- 田中秀和「母子世帯と貧困—日本型福祉社会との関係を中心に」『新潟医療福祉学雑誌』9(2) 2009
- 石山直樹「母子世帯に対する経済的支援策の意義について」『横浜女子短期大学紀要』22 2007 pp35-44
- 杉本貴代栄「貧困とジェンダー、母子世帯施策の動向と新展開」『法律時報』965号 2006 pp16-20
- 山田知子「高齢女性および高齢者をかかえる母子・寡婦世帯の生活困難にかんする一考察－ライフ・ヒストリーに見る家族崩壊と貧困化－」放送大学研究年報第8号 1990 pp69-90
- 出川聖尚子「若年妊娠女性の子育て支援に関する一考察－熊本市の若年妊娠女性調査から－」『社会福祉研究所報』第39号 2011.3

出川聖尚子「10代で出産した母子世帯の現状に関する一考察 —熊本県ひとり親家庭等実態調査の分析から—」
『社会福祉研究所報』第43号 2015.3

出川聖尚子「10代出産家庭への支援に関する一考察」『社会福祉研究所報』第45号 2017.3

社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会「子ども虐待による死亡事例等の検証
結果等について」第1次報告～第12次報告（平成28年9月）

沖縄県『ひとり親世帯等実態調査報告書平成25年』

<https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/kodomo/shonenkodomo/documents/h25zittaityousa.p>

沖縄県『沖縄子ども調査 調査結果概要版』平成28年3月

[https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/kodomo/kodomomirai/kodomotyosa/documents/
okinawakodomotyousagaiyouban.pdf](https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/kodomo/kodomomirai/kodomotyosa/documents/okinawakodomotyousagaiyouban.pdf)

沖縄県保健医療部地域保健課『沖縄県の母子保健』（平成18年度～平成28年度）